

# 八百号記念誌上展のご案内

一月号の「新任ご挨拶」でも触れましたが、本年十月号で書庭誌は創刊八百号という意義深い節目を迎えることになりました。昭和二十五年三月発刊以来、一度も遅滞休刊することなく発行してきました。今までの五百号・六百号・七百号の記念号では「記念誌上展」を開催してきましたが、八百号においても編集委員会での協議の上、別掲の要項によって、「記念誌上展」を開催することに決定いたしました。

書庭会においては、書庭誌百号ごとの誌上展と十周年ごとの対外展は、本会の存在感を明示する好機であります。一党一派に捉われることのない幅広い作品が書庭会の大きな特徴となっておりますので、各位の意欲的力作を積極的に出品下さるようお願い申し上げます。

この「八百号誌上展」が盛大にして充実した記念号となり、静村先生の御霊前による結果をご報告できたらと考えております。各位のご協力を切に期待したいと思います。

平成二十八年二月

書道研究書庭会

高橋 香樹  
平岡 不二子

## 要項

### 一、同人

・賛助出品とし、出品者全員の作品を掲載します。

### 準同人

・毛筆作品で半切以下縦横自由。

### 推薦

### 支部長

### 二、準推薦

・十月号が八百号になるので九月の昇試を八月に繰り上げて、準推薦以下は昇試発表を記念号とする。

### 八級

・毛筆作品で規定は昇試に準じます。

・祝賀会（授賞式）は十一月二十七日（日）を予定（ニューオータニ・東京）。そのため、七月海の日の「書庭の集い」は中止とする。詳細は四月号にて発表いたします。

## 半紙課題（予告）（四月二十二日締切）

平岡華雪先生書 夢は落花と飛ぶ（陳文述）

夢與落  
花飛

訳：夢は、はかなく落花と共に飛ぶ。

平岡華雪先生書 閑かさは何の心やはるのそら（千代女）

閑かさは  
何の心やはるのそら

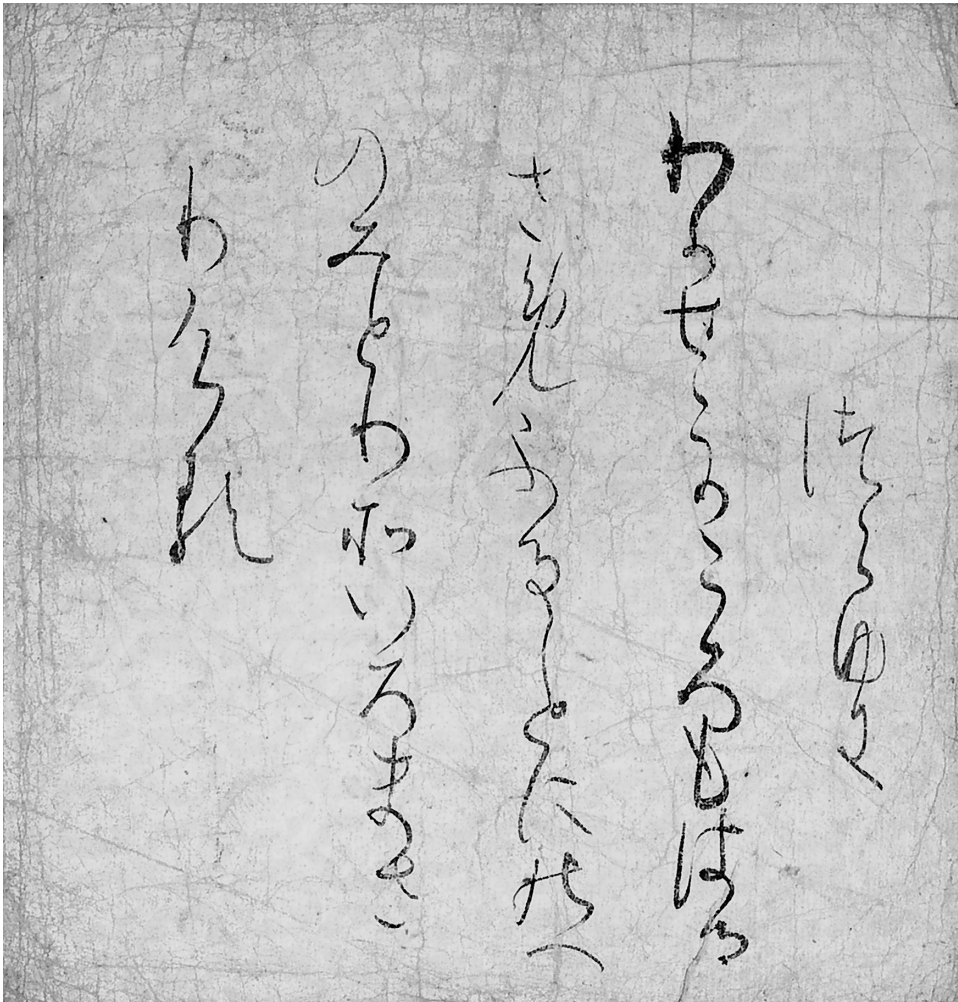
課題

龍

- (1) 書体自由
- (2) 半紙タテ・ヨコ自由
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
- (4) 出品料 四三〇円

今月は昇試課題発表月ですが「一字書」は出品出来  
ます。推薦取得者始め多くの会員のチャレンジを期  
待しています。

紙色庵松寸



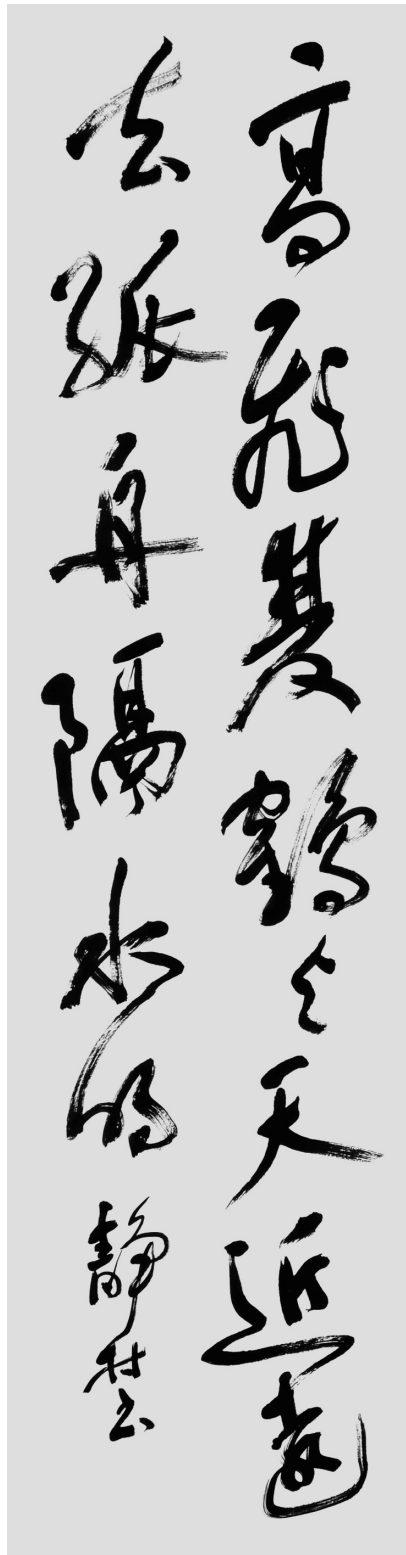
つらゆき<sup>徒</sup>  
支<sup>支</sup>  
わがせこが<sup>可</sup>ころもはるさめ<sup>免</sup>ふるごと<sup>能</sup>にのべのみどり<sup>利</sup>ぞ<sup>所</sup>いろまさり<sup>利</sup>ける<sup>介</sup>

※昇試随意参考（条幅・半紙）としてご活用下さい。抜粋可。

前田育徳会蔵

A  
鈴木静村先生書

高飛雙鶴與天近 遠去孤舟隔水明(馬一龍)  
高く飛ぶ雙鶴(さうかく)と天(あま)と近く、遠く去る孤舟水を隔てて明らかかり。



B  
高橋香樹会长書

墨継ぎは天と隔。高上部に余白。飛崩し方が多い字、字典参考。雙下部の左払いの反り注目。鶴偏旁の向き合いで緊め。與この書体古典にあり。天左右払い暢びやか。近遠之繞の変化を効果的に。去一画目渴筆で墨が抜けている。これは真似ないこと。孤旁の一画目高く強く。舟末画は下方でゆったりと収め。隔旁の一画目は右上に高く。水一画目、上方に突き出す形に。明への脈絡は筆脈が大切、この線は真似ないこと。



今回の課題は前半に画数の多い文字が並び、後半は少ない文字が多いので、書き易い文章ではないように思います。そこで、前半は草書を主にし、後半は行書を多用するようにしてみました。連綿は二ヶ所と少ないのですが、意連綿を意識しています。墨継ぎは「天」と「舟」ですが、渴筆を効果的に表出したい。

訳：二羽の鶴が天に近づくほど高く飛び、一隻の船ははるかかなたへ去ってゆく。

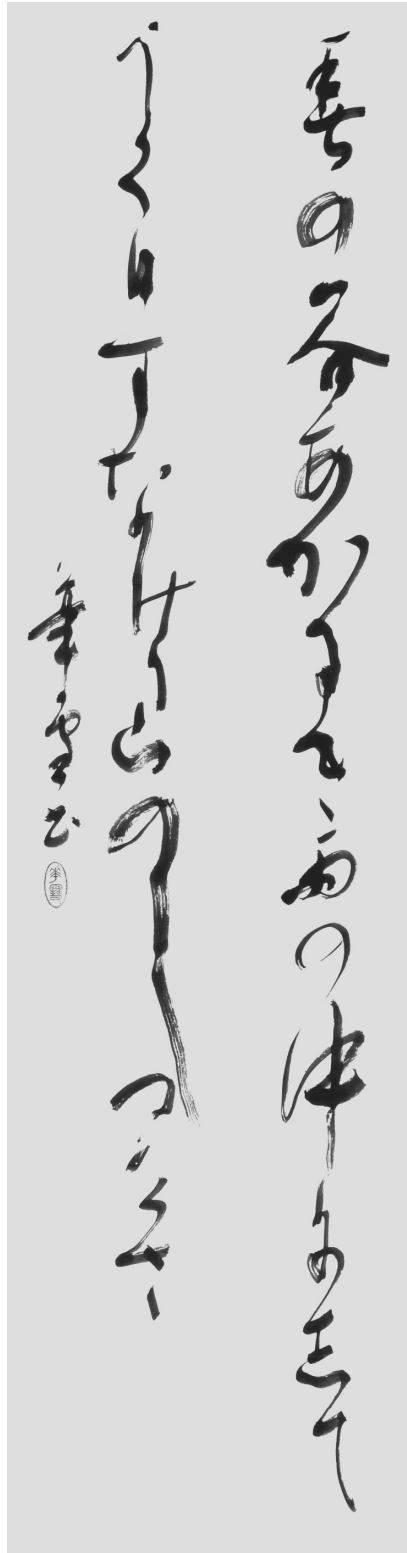
予告 (四月二十二日締切) 無限風光在陰峰 (毛澤東)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A

平岡華雪先生書

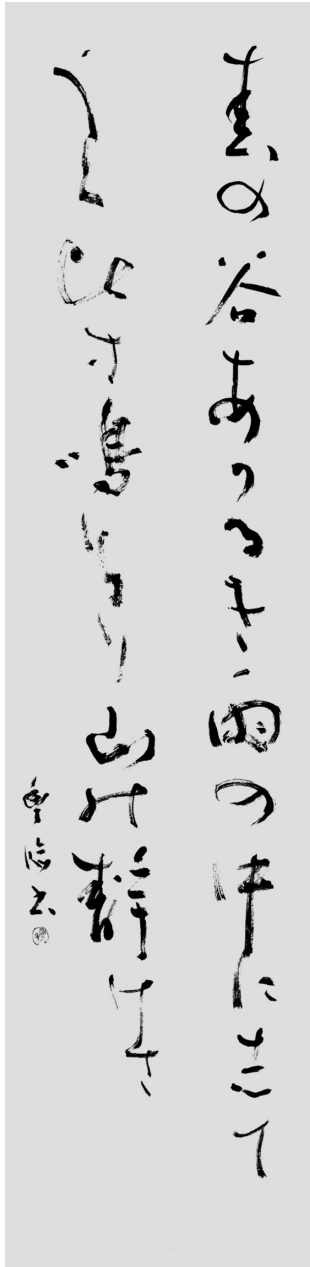
春の谷あかるき雨の中にして驚なけり山のしづけさ (尾上柴舟)  
春の谷あかるき雨の中に志してう久く日ひすなけり山のしづけさ



B

吉原豊臨先生書

春の谷あかるき雨の中に志してう久く比ひ鳴な介けり山能の静しけさ



学び方

今回、尾上柴舟の「日記の端より」から、昇級試験の課題の歌がとりあげられました。今までの五回に比べて現代に近い歌と思えます。華雪先生のお手本でも、分ち書きから入り、「あかるき」を強調させ右行をゆったりと終わらせています。左行では「う久日す」で細めにはじまり「なけり山の」と幅をとり、かつ、中心の移動、と思うと「つ介さ」で中心を戻らせつつも終わらせるといふ微妙な線の流れが見られます。

大正時代に書かれた歌ですが、右行「尔・志」、左行「久・日・介」と変体仮名も用いられていますし、漢字、ひらがなを適度にとりませて作品を仕上げていただきたいと思います。

予告 (四月二十二日締切)

道のべに清水ながる、柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ (新古今和歌集)

尾上柴舟は、明治九年生まれ、本名八郎。津山藩士・北郷直衛の三男として生まれ、同藩士・尾上勲の養子となった。養父の龍野転勤で津山を去る途中、旭川を舟で下ったことが忘れられず柴舟と号したという。

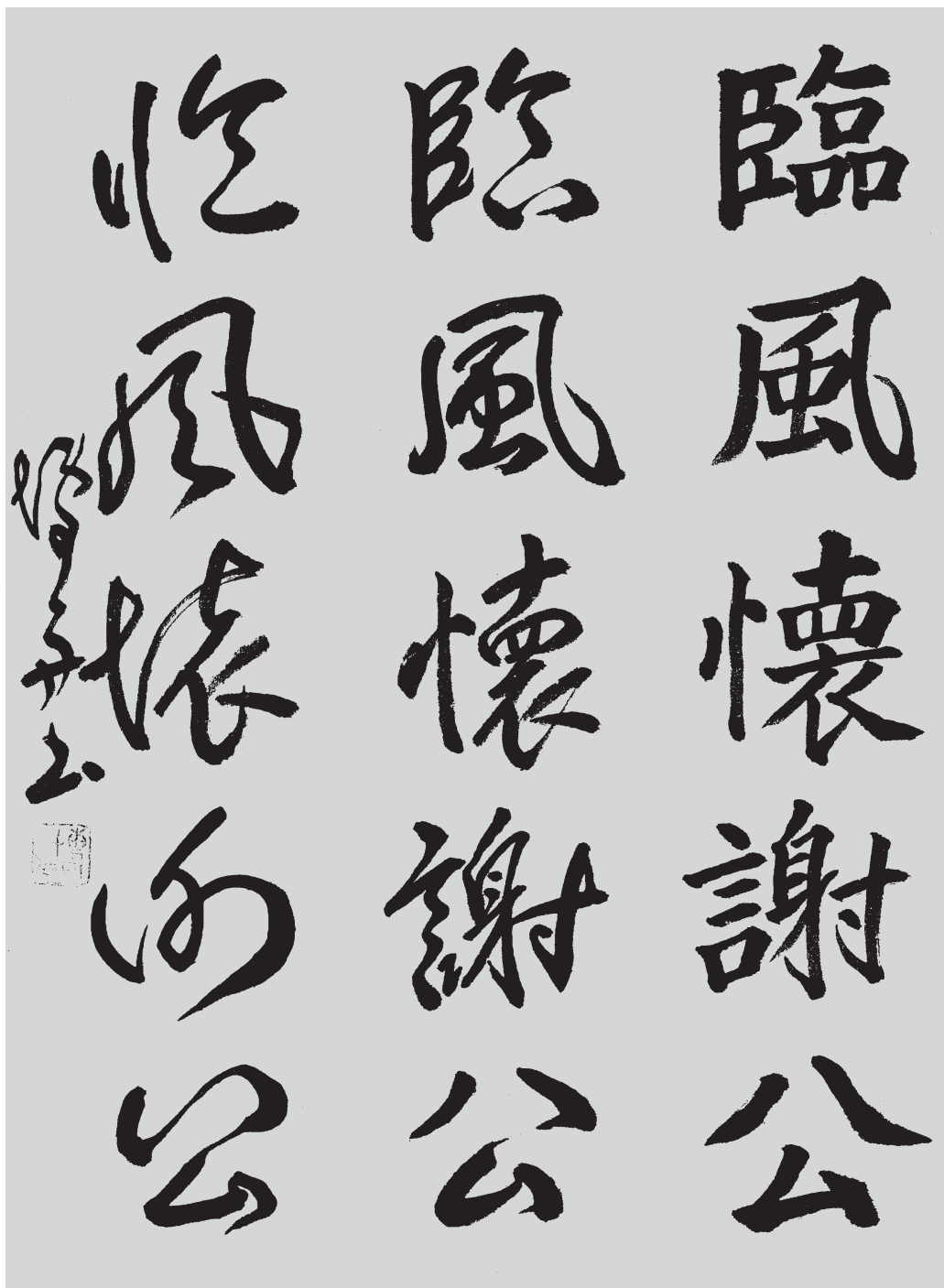
落下直文に師事。明治後期、自然主義に呼応して叙景詩運動を短歌界で推進した。優美な仮名文字の書家としても名高い。

昭和三十二年没。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

北沢博舟先生書

臨風懷謝公(李白)  
かぜのそ かに 臨んで しゃん 謝公を 懐わんとは

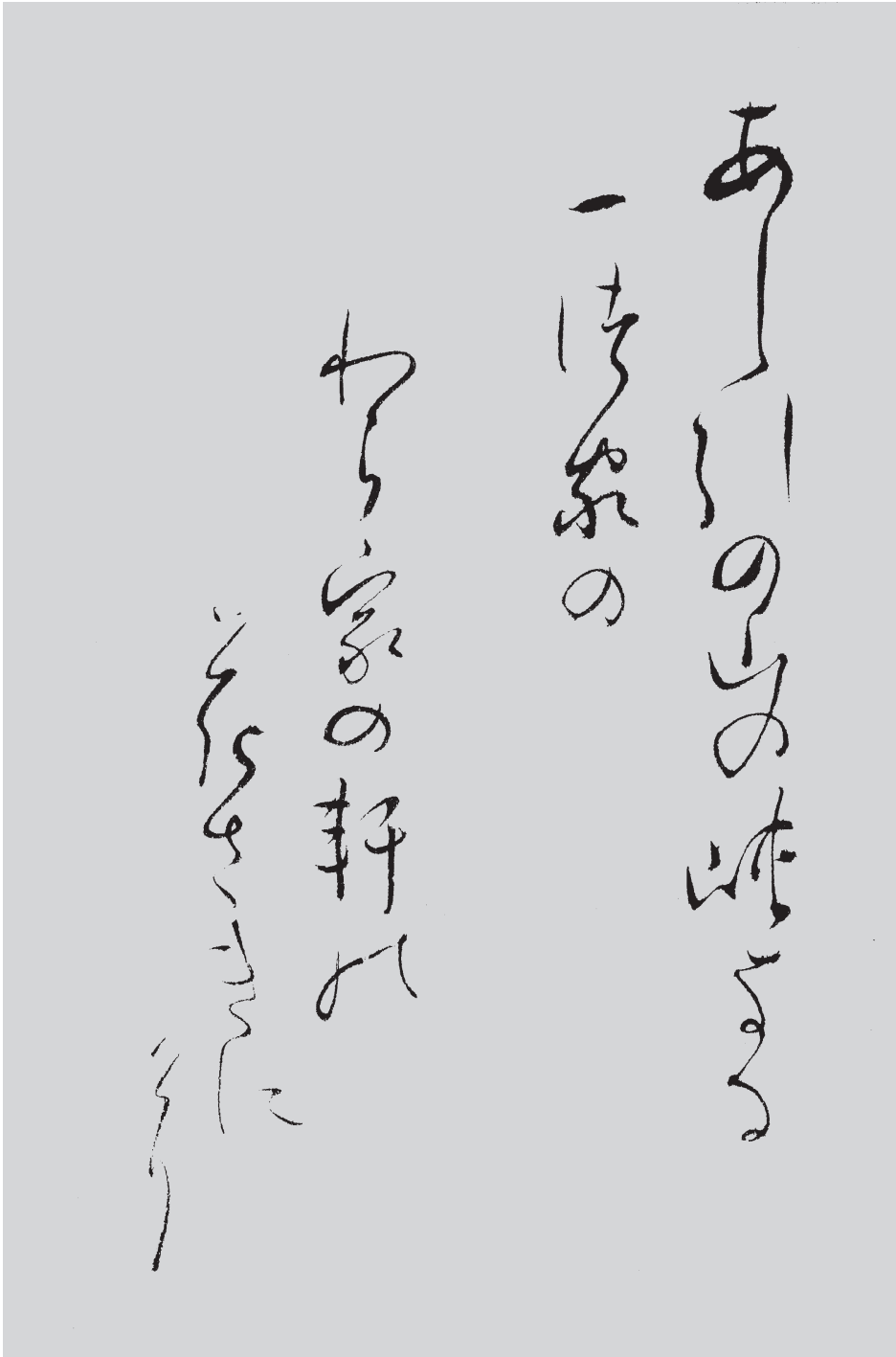


訳：風に吹かれつつ謝朓を懐かしむこの心を。

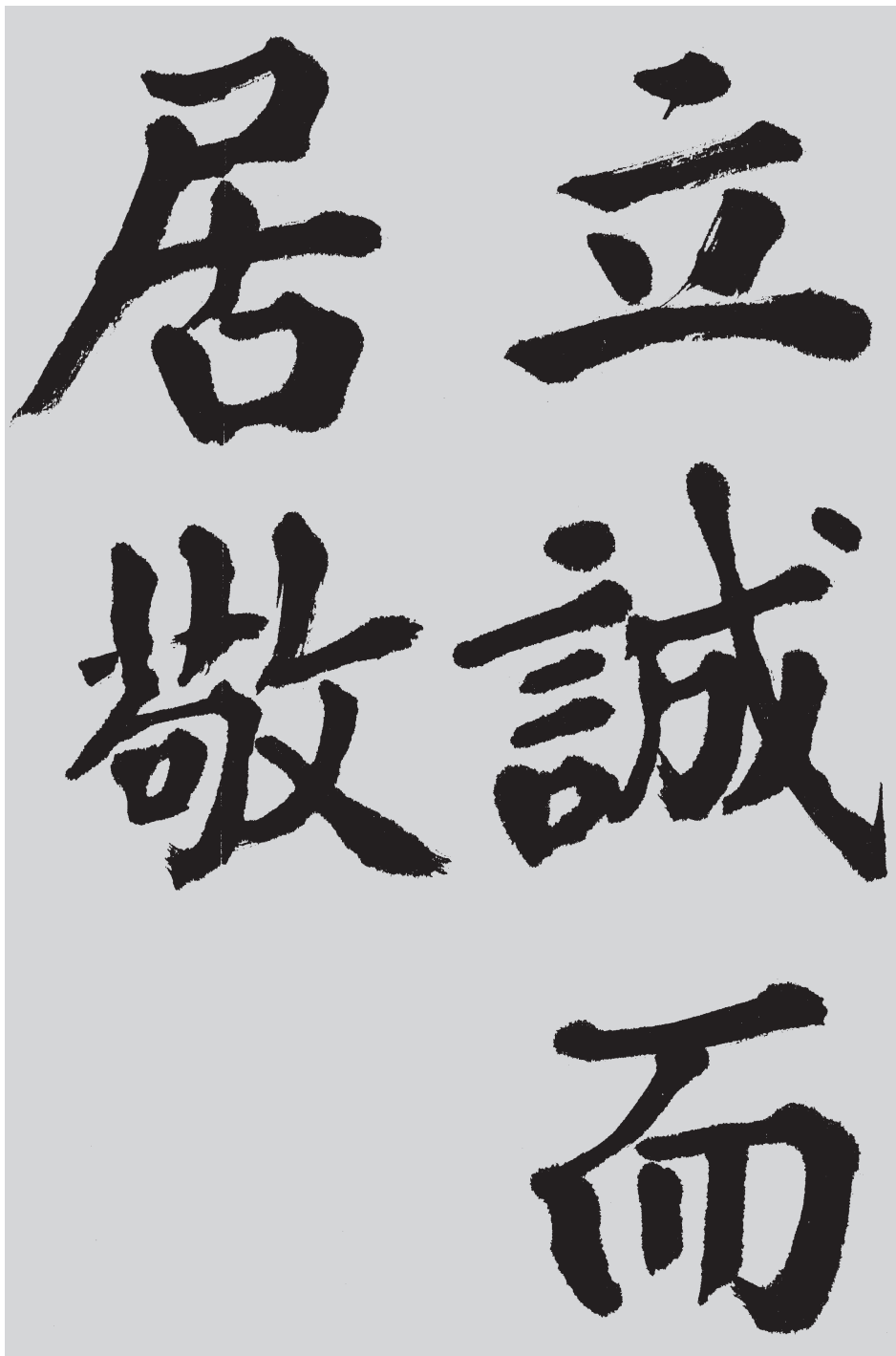
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

高塚竹堂先生書

あしひきの山の峽なる一つ家のわら家の軒の花さきにけり(左千夫)



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



平岡華雪先生書

誠を立てて敬に居る(張南軒)  
訳:至誠を立てとおすには、何としても敬の地位に居らねばならぬ。

〈中心的文字〉  
紙面中央に画数の多い文字を配した構成。特に「誠」は戈法、「敬」は末画を主画。この二文字の出来、不出来はこの一作に影響が大きい。



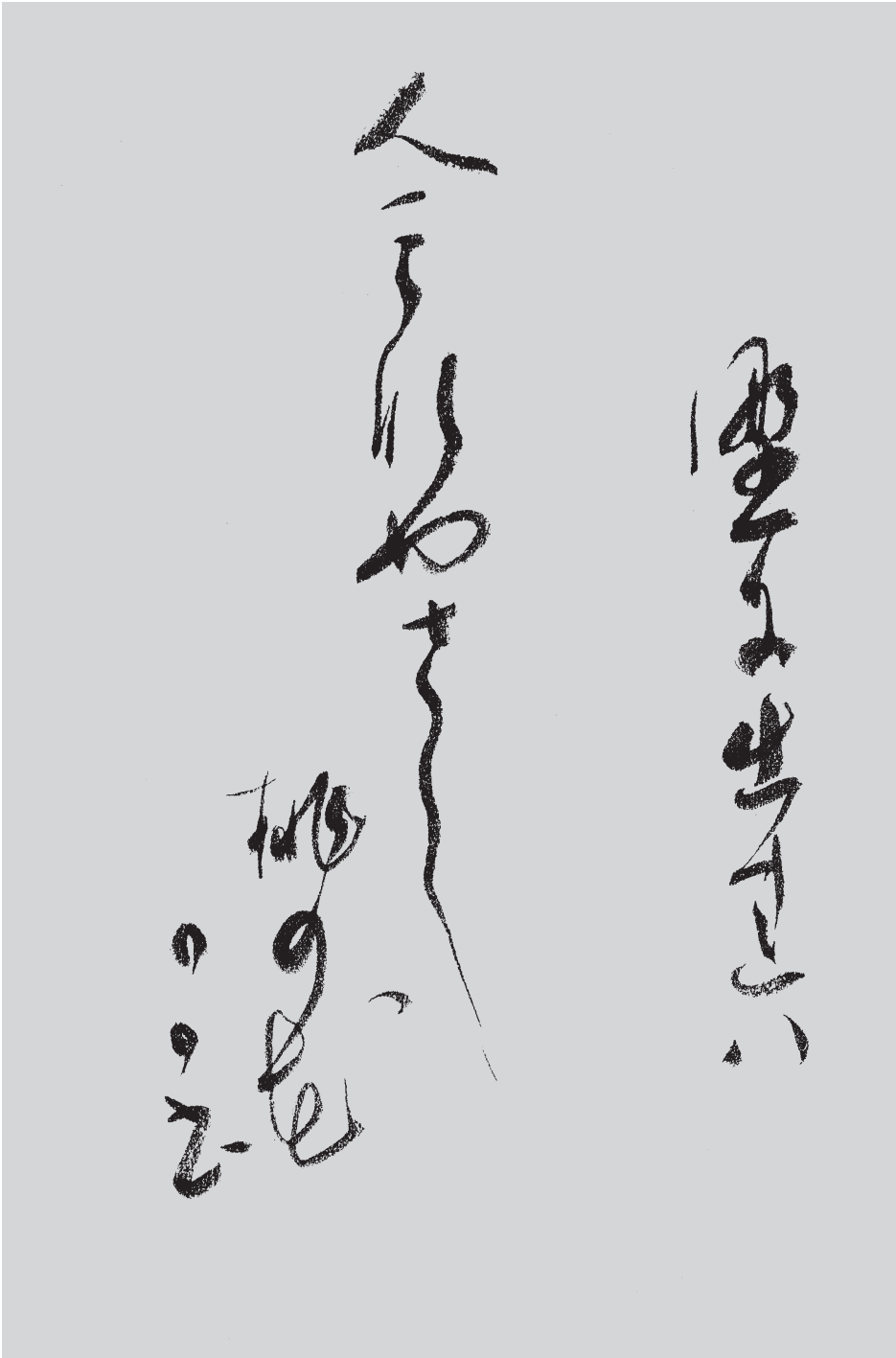
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



平岡華雪先生書

野<sup>の</sup>に出<sup>で</sup>れば人<sup>ひと</sup>みなやさし桃<sup>もも</sup>の花<sup>はな</sup>(素十)  
野<sup>の</sup>に出<sup>で</sup>れば人<sup>ひと</sup>みなやさし桃<sup>もも</sup>の花<sup>はな</sup>(素十)  
野<sup>の</sup>に出<sup>で</sup>れば人<sup>ひと</sup>みなやさし桃<sup>もも</sup>の花<sup>はな</sup>(素十)

〈常に全体を見渡して〉  
初歩段階では二字、三字とか、連綿区分を書いていることが多いので、全体を見渡す「ゆとり」がありません。全体を見比べるよう心がけて下さい。速さはどうか、連綿のリズムは、筆の当たりは、墨つきは…等、把握できると思います。



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



路川千曄先生書

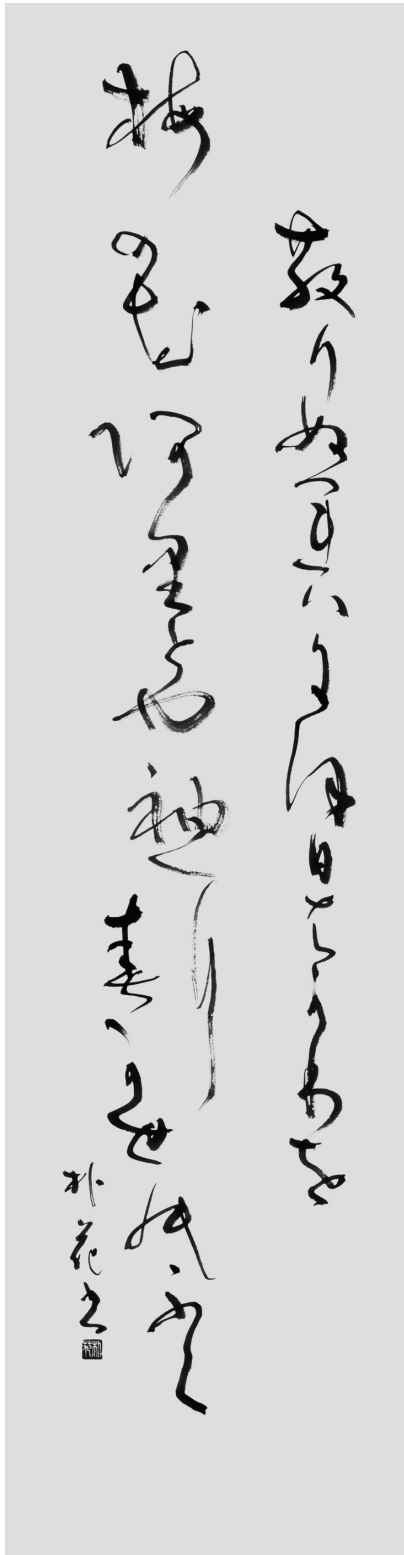
波瀾晴泛三春色 桃李爭開兩岸芳（陳上卿）  
波瀾晴は泛ぶ三春の色、桃李争い開き兩岸芳し。



訳：晴れた波にまで春いっぱいの色が見え、咲く桃李の花は川の左右の岸におっている。

向山朴花先生書

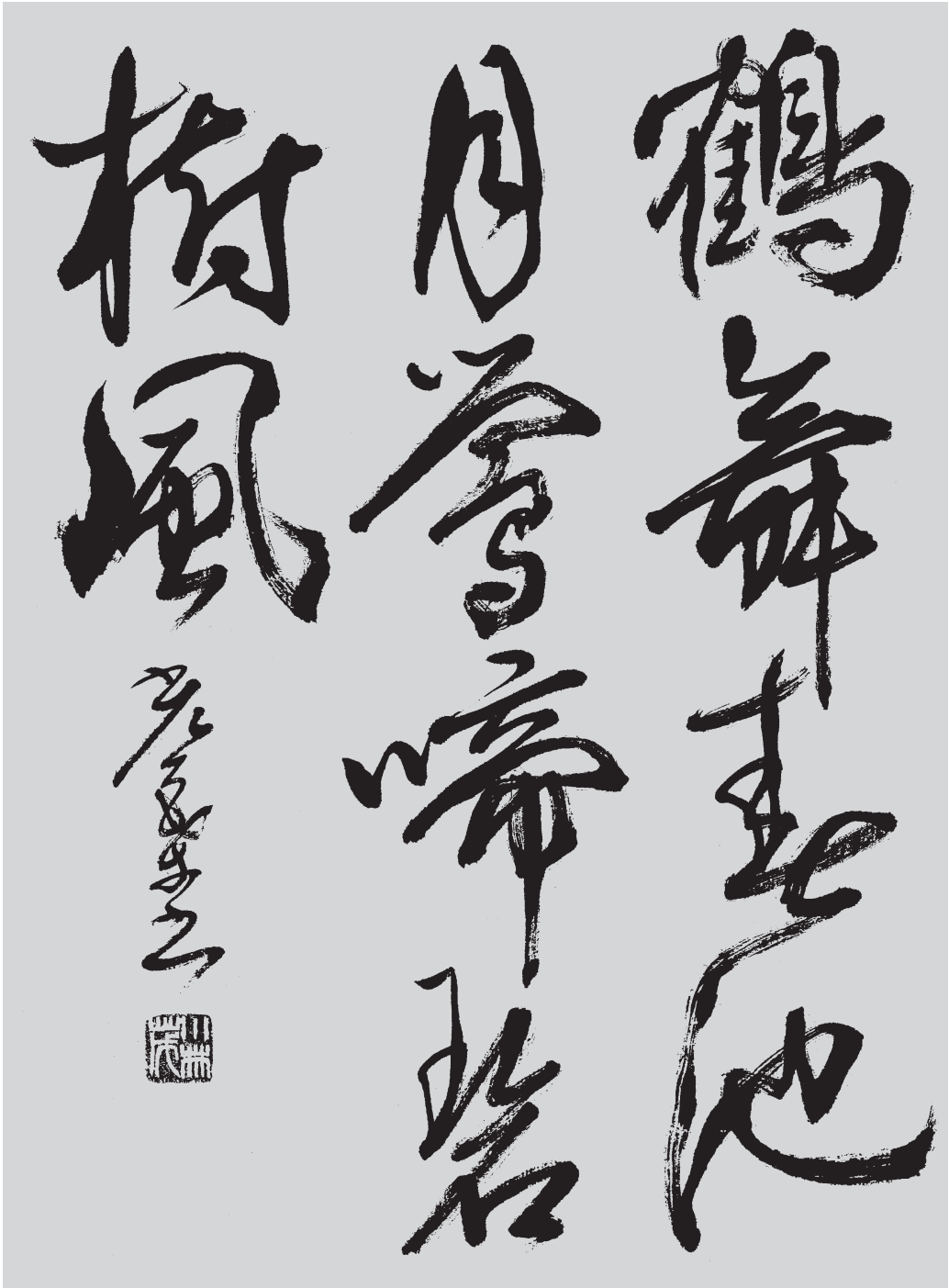
散りぬればにほひばかりを梅の花ありとや袖に春風のふく（新古今和歌集 藤原有家朝臣）  
散りぬれ連八尔保日者可利を梅の花阿里と也袖耳春可せ能ふく



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

小林光葉先生書

鶴舞春池月 鶯啼碧樹風（區大相）  
鶴は舞う春池の月、鶯は啼く碧樹の風。

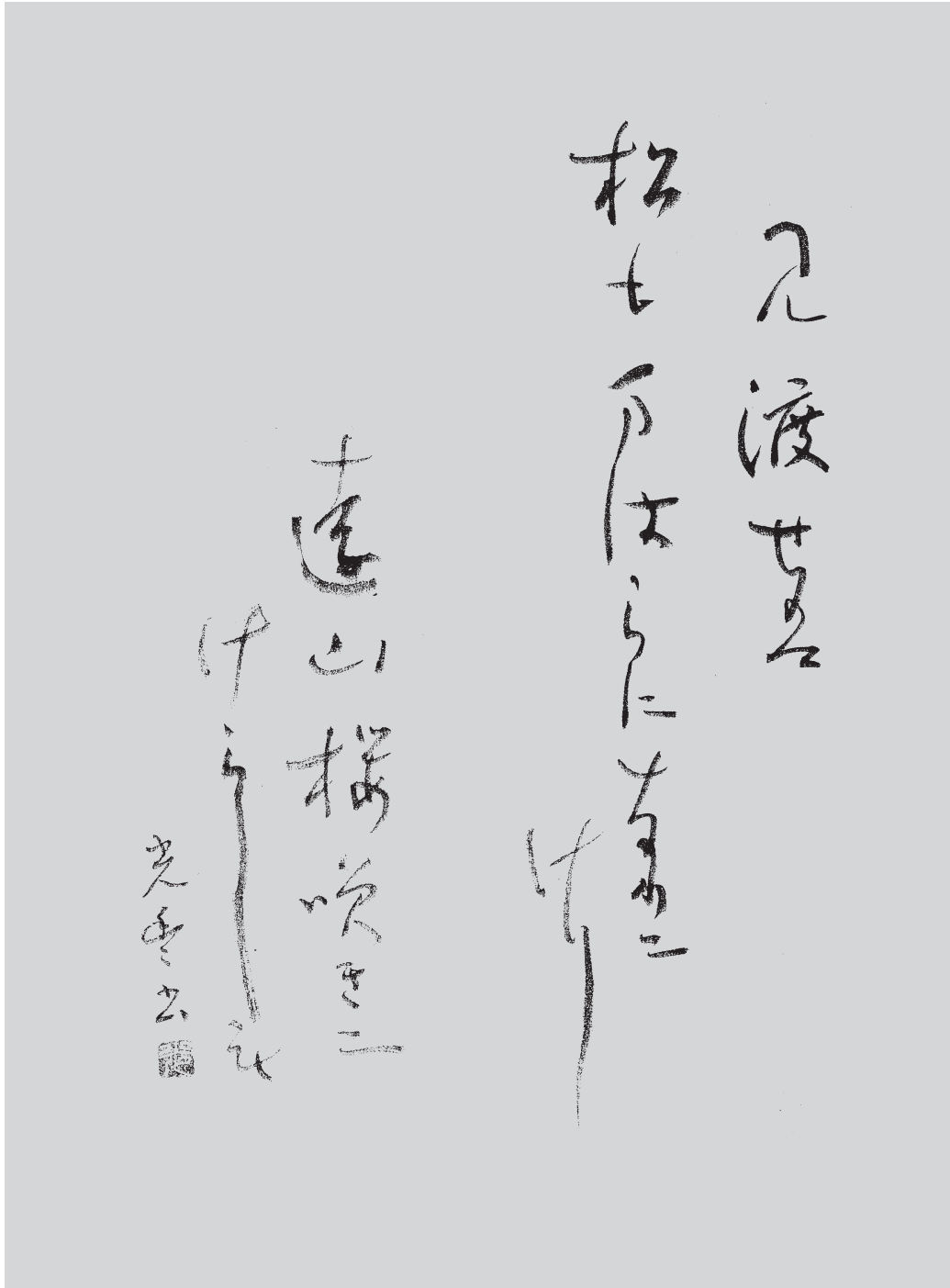


訳：鶴は春の池に影うつして舞い遊び、鶯は碧樹風吹く辺でしきりに鳴いている。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

絹  
村 光 豊 先 生 書

見わたせば松もまばらになりけり遠山桜咲きにけらしも（続後撰和歌集 土御門院）  
見渡せ盤松も万はらに奈利二けり遠山桜咲き二けらしも



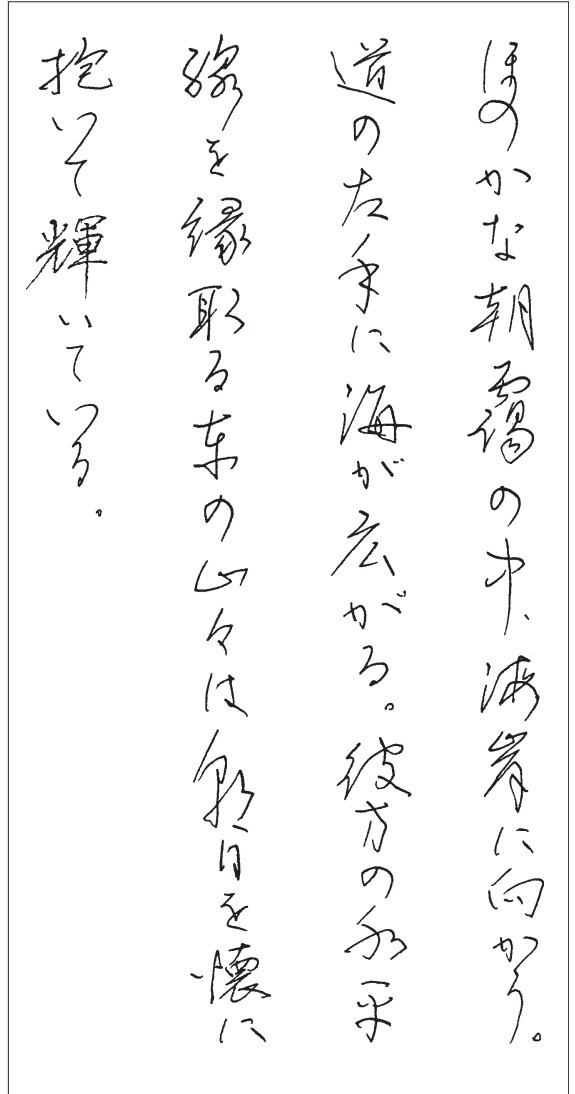
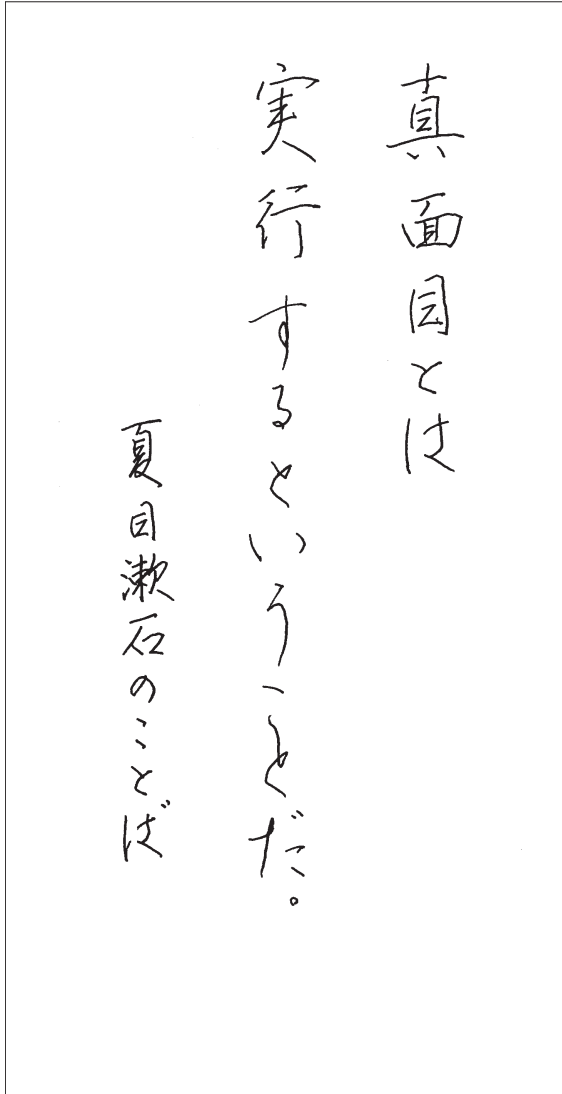
◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

松浦江波先生書

石原春香先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)



課題1 (初段階以上)

ほのかな朝霧あさぎりの中、海岸かいぎんに向かう。道の左手に海が広がる。彼方の水平線を縁取る東の山々は、朝日を懐に抱いて輝いている。

「鷺と雪」北村薫

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位に)次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四三〇円

課題2 (初段階以下)

真面目まじめとは実行するということだ。

夏目漱石のことは